

明星院だより

発行所
広島市東区二葉の里
2丁目6-25
明星院
TEL 082-261-0551
FAX 082-262-1827

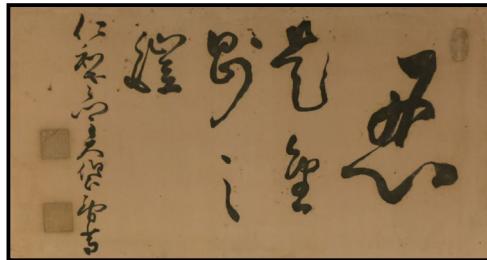
令和八年丙午歳の

年頭に当たり、謹んで
新春のお慶びを

申しあげます



忍は是金剛之鎧なり
仁和寺老門主智等



元旦

明星院第20世住職



昭和十一年 公公平書 浅井泰雄氏寄贈

徳川家康公遺訓

人の一生は重荷を負うて遠き
道を行くが如し 急ぐべからず
不自由を常と思えば不足なし
心に望み起こらば困窮したる
時を思ひ出すべし 堪忍は無事
長久の基 怒りを敵と思へ
勝つ事ばかり知りて負くる事を
知らざれば害その身に至る
己を責めて人を責むるな
及ばざるは過ぎたるに勝れり

人生には多くの苦労があり
忍耐や謙虚さの重要性を説いて
焦らず一步ずつ着実に進む
べきだという教えです

当山住職八木恵生が
後七日御修法定額僧に選定され
定額位に補任さる

国家の安泰や世界平和などを祈願する「令和八年御七日御修法」が一月八日より十四日までの七日間、京都の東寺灌頂院道場で厳修されます。当山住職八木恵生は総本山仁和寺より定額僧に推され、真言宗各派総大本山会より定額位に補任されました。

令和八年丙午歳後七日御修法
定額僧推举の件

首標につき、真言宗各派総大本山会より御修法協定に基づき、定額僧推举の懇請がありましたが、貴僧正様を推举申し上げたく、就而同封の受諾書に住所、御名、御捺印の上、返送下さいますようお願いいたします。

令和七年十月一日

明星院住職
権大僧正 八木 恵生 殿



真言宗最高儀後七日御修法

後七日御修法は、宗祖弘法大師の勤修以来、千百九十年以上続く真言宗最高の大法で、真言宗各派の管長、大僧正が出仕し、七日間二十一座の熱修が奉修されます。

弘法大師の進言により、中国・唐の不空三藏が皇帝のために始めた例にならって承和元年（八三四）に宮中真言院で當まれたのが始まりです。大師は同修法を恒例化することを朝廷に重ねて進言し、翌年、最初の年に続いて大師自らが大阿闍梨となつて、玉体安穩・万民豊楽・五穀豊穣を祈念致しました。それ以後、皇室の衰微や戦乱、明治の廢仏毀釈などで一時中断はあつたものの、今日まで脈々と継承されています。

現在は、真言宗各派の十八本山で構成する真言宗各派総大本山会（各山会）と東寺が主催して行われています。

因みに、後七日とは正月一日から七日までの前節に対し、後七日といま



定額位 位記御送付の件

拝啓 深冷の候となり、何かと御繁忙の御事と存じ上げます。

明令和八年丙午歳後七日御修法には、定額僧阿闍梨として御勤仕の段、洵に御祝意に存じ上げます。

茲に定額位 位記を御届けいたしますので、幾久數く御受納くださいますよう御願い申し上げます。

無魔御越年の程、呉々も御祈り申し上げ、先ずは右甚だ簡略乍ら要用のみ言上いたします。

令和七年十一月吉日

敬具

真言宗各派総大本山会
権大僧正 八木 恵生 殿

定額位

令和七年十一月五日

真言宗各派総大本山会

金剛夜叉明王

降三世明王

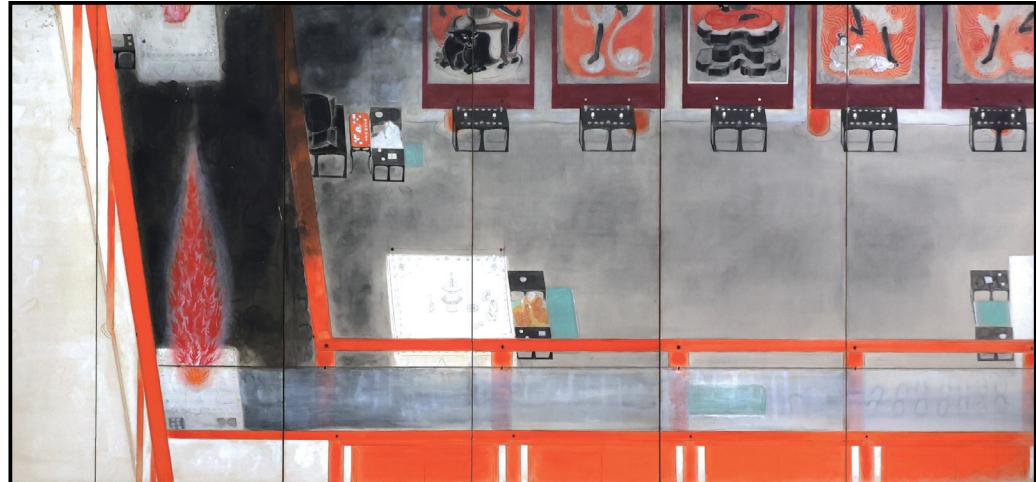
不動明王

軍荼利明王

大威德明王

二間觀音

増益護摩



後七日御修法図屏風 当山所蔵

片壇

息災護摩

當界壇



平成13年出仕の龍生師

地方の一寺院の僧侶として定額僧に出仕し、定額位に補任されることは最高に榮誉なことで、当山にとりましても25年前の先代住職八木龍生師に続く慶賀の極みでござります。因みに明治以降、島大聖院吉田裕信師を含む3人目の補任となり

広島県内で13人目（福山4人、庄原1人、尾道5人）安芸地区からは、宮

定額位
八木龍生殿
平成十二年十一月四日
真言宗各派総大本山会

高野山参詣と金剛流御詠歌御室金剛講創立10周年記念公演鑑賞の旅ご報告

令和七年十一月十八日～二十日

大師堂再建御礼参りの四国八十八ヶ所遍路の旅が去る4月18日に結願しましたので高野山奥の院へ参詣致しました。併せて山主が仁和寺・御室派教学部長時代に携わった御室金剛講が10周年を迎えた記念公演『仁和寺の祈り～都に響き舞う』が祇園甲部歌舞練場にて行われ伝統が紡ぐ幽玄のひとときを鑑賞しました。予定には無かったのですが、19日夜に門跡さまから直接電話を頂き「明朝高円宮妃久子殿下が来られるので玄関で一緒に出迎えて下さい」と有り難いお誘いを受け一同整列して御尊顔を拝しました。続いて仁和寺の御殿伽藍・大覚寺の諸堂を参拝し錦秋の都に名残を惜しみつつ無事に帰広致しました。



大伽藍への入口 錦秋の蛇腹道



霞の降りしきる高野山奥の院にて
あられ



人間国宝 井上八千代
家元による京舞



瀬川門跡猊下によるお加持



大覚寺 山川龍舟門跡と共に



仁和寺 瀬川大秀門跡と共に

縮景園で供養式

原爆犠牲者を悼む



去る八月一日、広島市中区の縮景園で原爆投下直後に同園に避難して亡くなつた犠牲者の慰靈供養式が當りました。広島県と供養会が主催し、会員や地元の幟町小学校・幟町中学校・女学院中学校の児童生徒たち約80人が参列し、茶道上田宗箇流による献茶も行われました。

児童生徒を代表して、宏雅副住職の長女雅美（幟中2年生）が「平和への誓い」を発表読み上げました。

昭和二十年八月六日、広島に原子爆弾が落とされ、多くの人の命が一瞬にして奪われました。爆風によつて建物は崩れ、熱線によつてすべてが焼かれた街。大やけどを負つた多くの人々が、水を求めて、ここ縮景園に逃れてきたといいます。

昭和六十二年に、原爆犠牲者のご遺骨が発見されて以来、この供養式も三十八回目を迎えました。

焦土と化し、七十年は草木も生えないと言われたヒロシマで、郷土の先人の皆様が、並々ならぬ努力で街の復興に力を尽くしてこられました。

そのおかげで、被爆後八十年を迎えた現在のヒロシマは、豊かな水と緑をたたえた「国際平和文化都市」を目指す活力のある街になりました。

それと同時に、原爆投下後の悲惨な実情が風化しないように、平和記念公園をはじめ、市内各所に当時の状況を伝える資料や遺跡や被爆樹木などが残され、核兵器の恐ろしさを伝えていきます。しかし、今も核兵器を持つている国がたくさんあり、世界が平和とはいえません。連日報道されているイラン・イスラ

平和への誓い

エル間の紛争、ウクライナ・ロシア間の戦争などで、苦しむ人々が存在しているのが現実です。

もしこの争いの中で、たつた一発でも核兵器が使用されたなら、私たちの日常は三度奪われ、家族を失い、緑豊かな郷土も消滅してしまうでしょう。

私たちはこのような現実から目を背けず、真剣に向きあつていき、これから先の世界に真の平和を築いていかなければなりません。

平和な未来をつくつていくためには、私たち一人ひとりが、身近なところから行動を起こす必要があります。

被爆の実相を学び、現在でも世界で続く紛争に目を向けること。

戦争の悲惨さと核の怖さを知り、平和な未来のために学び続けること。

学校や地域、社会で、お互いを尊重し、助け合う心をもつこと。

そして、知つたこと、学んだことを行動につなげて発信すること。

一人一人は微力ですが、自分たちにできることを考え、行動することで、平和な世界の実現を目指していくことをここに誓います。

令和七年八月一日

広島市立幟町中学校

八木 雅美

広島神輿行列に出仕

江戸時代二百六十年の平和の礎を築き、平和の神様として祀られる東照宮の御祭神 德川家康公。その家康公の没後五十年ごとに行われていたのが、重さ約一トンの大神輿を中心に、豪華な山車や芸能を織り交ぜ、武士と庶民が共に天下泰平の世を謳歌した大行列「通り祭礼（どおりございれい）」です。

この祭礼は、文化十二年（一八一五）を最後に、幕末の混乱や戦争、そして昭和二十年（一九四五）の原爆投下の影響により、三回連続で中止され、長く途絶えていました。

しかし、平成二十七年（二〇一五）、平和な時代を迎えたことを受けて、実に二百年ぶりに復活。約七万人の観客が見守りました。

そして、被爆八十周年を迎えた今年、平和都市広島に甦った伝統を子どもたちへ繋ぐため、五十年に一度の「通り祭礼」を、新たな祭り「広島神輿行列」として開催しました。そこには、平和な未来と地域の繁栄、人々の幸福と安寧への深い祈りが込められています。

当時は、原爆をも乗り越えた強運の大神輿（市重文）をはじめ、花車や伝統芸能も披露され、時代装束をまとった参加者たちが、江戸時代さながらの行列を再現しました。

山主も実行委員会顧問・七社寺会代表として参加し行列に花を添えることが出来ました。



令和八年

明星院行事予定表

奉納御礼

一月一日～三日
修正会・新年初祈祷

一月一日
開運厄除祈願節分星祭

三月二十日
春季彼岸会

八月上旬

お盆勤め

八月十三日

うら盆施餓鬼会

九月二十三日

秋季彼岸会

十二月十三日

赤穂義士討入り大祭

奥谷順子様より御尊父稻田素邦画伯（当山元総代長）の絵画十数点をご寄進いただきました。

編集後記

☆広島神輿行列開会式での徳川家第十九代当主徳川家広氏の挨拶より「戦争のない二百六十年を築いた江戸時代と被爆終戦八十年間日本は平和が保たれている。しかし世界に目を向けると今も猶、紛争が絶えることはありません。唯々世界平和を改めて祈るばかりです。」と

☆美しい日本の四季が崩れ二季になりました。体調管理にお努めください。